

SERIES

明日のスポーツをめざして 2

岩手県クレー射撃協会 理事長 村井直衛

本年、新潟で開催された第64回国民体育大会クレー射撃競技において、本県選手団は、総合団体5位、スキート団体3位、スキート個人では武内重人選手が3位入賞を果たした。

本県のクレー射撃は、昭和45年の岩手国体において団体総合優勝とスキート団体優勝を果たした輝かしい歴史を持っている。平成元年の第44回国体においても団体総合8位、スキート団体5位に入賞しているが、今回はそれ以来の久々の入賞である。

クレー射撃は、古くから王侯貴族のスポーツ、紳士のスポーツとして欧米で発展し、かなり早い時期からオリンピック種目となっている由緒ある競技であるが、日本においては、昨年の北京オリンピックで中山由起枝選手が女子トラップ競技で4位入賞した際に少し話題になった程度で、残念ながら、一般にはその内容は殆ど知られていないマイナーな位置付けにある。

競技は散弾銃を使用し、空中に放出されたクレーと呼ばれる素焼きの皿の標的を撃つ。種目はスキート競技とトラップ競技に別れ、スキートは左右から交互に放出される標的を撃ち、トラップ競技は前方15メートルの位置から放出されて遠ざかる標的を追う。

銃を使用する競技であることから、「銃=凶器」と考えているような無理解な人々からは白眼視される上、散弾銃の所持には年齢制限があるため、中学生高校生の若年層の底辺が望めない。

銃を所持するには、公安委員会による各種の厳重な審査や試験を経なければならず、所持する銃や装弾の取扱には極めて厳正な自己管理が要求される。

そのため、若い競技者の参入は少なく、40歳代～60歳代が競技人口の中心を構成している。



クレー射撃スキート団体で3位に入り、ガッツポーズする(左から)西川良幸、武内重人、佐藤一将
-新潟県長岡市・長岡国際射撃場(岩手日報2009年10月2日付朝刊)

このような現状の中で、個人3位入賞を果たした57歳の武内選手の成績もさることながら、今回の国体入賞を支えたのは、スキート団体における26歳と32歳の本県では数少ない若年選手2名の健闘であった。

岩手県クレー射撃協会では、現在、来るべき2016年の岩手国体に向けて、若年競技者の発掘と育成を最大の強化課題としており、本年度開催した優秀コーチ招聘事業においても、現在の競技成績には一切関係なく、比較的若い年齢層から選抜した選手を受講生の中心とした研修を実施している。しかし、それでもまだまだ若年競技者が不足している現状にあり、若年層の参入を待ち望んでいるところである。

反面、武内選手が示すとおり、クレー射撃は生涯スポーツとして楽しめる、競技年齢が極めて長い競技でもある。現在、日本国内に限らず、オリンピックやワールドカップにおいても世界の50代60代の選手が活躍している競技で、オリンピックの歴史における出場選手中、80歳代の最高齢を記録しているのはクレー射撃競技の選手である。

中高年のパワーや落ち着きもまた侮れない競技で、中高年選手の競技力の向上も岩手国体に向けた今後の強化の大きな課題である。

クレー射撃は、参入する入口には様々な面倒がある競技ではあるが、一旦始めてしまえば、オレンジ色のクレーを空中で花火のように粉碎するその爽快感にたちまち虜になってしまう。若年層に限らず、様々な年齢層の新規参入が待たれるところである。